

九段の坂を登っていた。テルミススが宿っているあたりにはさしかり、これからこの坂を登りきり、詩集を出している会社へ赴こうとしていた。その先には煙草がある。用事を終えた後は、いつもと同じようにぼろぼろ、店の職人たちに雇って精々と酒を呑みながら煙を吐くことになるのだが、そのことを考えながら右手にある大鳥扇を見ていた。

「首身離守心不恋（首身離るとも心戀りず）」という詩句がある。数年前、千鳥ヶ淵の咲き誇る桜の樹の下で、一緒にいた詩人が、英訳ありとせばあの大鳥扇の向うの杜から出てきて満開の花の中を遺漏している頃なり、と呟いた。この春には風に吹かれる花びらの中で、盛り切りの酒を長い時間かけて呑みながら、ひとり夕陽の色に染められる渾身の水を絞っていた。

初夏の日差しを浴びた鳥居の上に、あの人が膝かけていた。足をとどめて遠の方に視線を落とし緑の深い覆った水の色を見やっていると、襦袢のような、恐らくどニールか何かで織いローブで括つてあるのだろう、石垣の傍に浮かんで動かないものがあつた。初めのうち、わけもなくそれは死体であると納得していた。「身既死守神以重ノ子魂魂守為鬼雄」(身既に死すれども神以て重にノ子の魂魂守と為る)。あの人の顔が空に大きく広がって、別格官舎社の境内を包み込むように霞んで見えた。

書類を小論に抱えながらパイプに火を点けると、向うから女子学生が数人、声高に喋りながら近づいてきた。性的な会話ははずであつたが、滑溜した車のエンジン音やクラクションの音に混じって何やら雑種の鳥のさざめきに似ていた。

坂のある側は美しいのだが、新島のビルディングのある景色はいかにも粗末な気がした。それでも通りを左に折れると、ところどころ古い家並を残したただらだらの坂が鞠町へと通じている。とある一軒の家の門前に、塙が崩れて怪人が出て来ても聞かない旨の立札があつた。

Anita Japlin's Summer track が印象深いのだが、小さな嵐のように胸の中に湧いたのは More over だった。死体の襦袢が浮かんでいると思ったのは、そのあたりがいかにもそのような場所に相応しいと考へていたからであり、このあたりをそぞろ歩くと、京都の円山公園の巨大な夜板とはまた異なった満開の桜の不気味さを想い起こすのだった。

すでに選った詩人は存在は哀愁であると考えたし、スペインに住んでいたある作家は男の悲劇についての小説を発表していた。いまはもうたれも見えないけれど、夏が去り、秋が訪い、年毎の手筋が経たれば、その所まりの中で風は冷たく、寒そうに唇を噛む人々の足の動きだけが、忙しげにいつまでもつづくのを見るのだから。

練字生

